

自由に就いて

岸 畑 殖 夫

自由とは一つの行爲を爲すことも爲さないことも可能であるといふことと解せられる。しかし道徳の根據となる自由は、單に一々の行爲に於ける自由のみ止るものではなく、一々の行爲が自己のものとして、同時に自己の善惡の自由でなければならぬ。道徳の立場に於いては行爲と自己とは、例へば後悔の體驗に見られる如く——そこでは後悔せられるものは單に一々の行爲にのみ止らず、それが同時に自己自身に對する後悔として深化せられる——行爲は自己から發しながら、自己は却てその行爲によつて變化し、そのものとして成立するといふ、媒介的相即の關係がなければならぬ。すなはち自由とは一々の行爲に於ける自己の善或は惡の可能性と解せられる。

しかしかく自由を可能性として把握するのみでは充分ではない。自由は常に現實性であり、自己は現在に於いて自由なのであつて、可能性が單に可能性に止るときには自由であるといふことが出来ないからである。同時に又自己とは現實性に於いて、現在に於いて自由なのではあるけれども、自己の可能性を自覺することなくしては自覺的に自由であるとは言ふことが出来ない。單に自由であるといふに止らず、自覺的に自由であるためには、可能性と現實性と對立的媒介關係が自覺せられねばならない。

更に善と惡とを個體と普遍との相即或は背反と考へるならば、個體の普遍からの背反は單に個體が普遍を一重的に

否定して孤立することとは考へられない様に思はれる。個體と普遍との關係のみからは惡の善に對する積極的な對立性は理解出來ない。善と惡とが相互に積極的に對立するものであるならば、個體の普遍からの背反に積極的な意味を持たせるものがなければならぬ。

かかる現實性と可能性との、又善と惡との對立を成立せしめるものが所謂基體性であると考へられる。しかしながら、對立は統一を豫想し、その地盤の上に成立つ外はないのであるから、基體性が對立の根源であるといふことは、却てそれ自身對立を即目的に統一する直接性であるからに外ならない。この基體性を先づ端的に、非合理的な生命の直接的統一として規定しよう。

生命は生物體にあるのではなく、又環境にあるのではなく、環境が生物體を規定すると同時に生物體がその規定に反應することによつて環境を變化せしめるといふ、兩者を二つの極とする不斷の交互作用的關係であると言はねばならない。しかし兩者は外的に一應の區別を持ちながら、實は交互作用的に滲透し合ひ、その區別は絶對的なものではない。あり得ないから、生命は生物體と環境との媒介的にして直接的な自己同一性に於いて成立すると考へられる。同時に生物體は環境と外的に媒介的關係にあるのみでなく、孤立してあるものでなく生み出されて來たものとして、種族とも同様の關係に立つ。種族は生物體の根源として、生物體の生死に拘らざる連続性を持つが、それが自己を維持するためには生物體相互の生み生れるの關係を媒介としなければならぬから、その連続性も却て生物體の生死に於ける非連続の契機を持つのでなければならぬ。種族と生物體とは内的な媒介的直接的關係に立つのである。更に内的、外的な二つの媒介關係は相互に別々にあるものでなく、兩者は個々の生物體に於いて媒介せられてゐるのである。す

なはち生物體は直接に環境との關係に立つものではない。あらゆる生物體を容れる一様な場所としての自然の如きものと直接的に交渉するのではなく、その間には種族が入り、言はば種族を通じて、種族的に特殊的な環境と交渉するのである。だから種族は、生物體夫々の持つ環境に言はば限界を劃するといふ意味で、生物體よりも先に環境を持つと言へるであらう。それと同時に種族が自己を維持するためには却て生物體と環境との關係を媒介としなければならぬ。生物體を離れては種族の自己維持といふことは無意味であるから、種族は個々の生物體が生きたといふこと、すなはちそれらと環境との關係をも媒介としなければならぬ。生命性は生物體と環境、生物體と種族、更にこれら二つの關係相互の、媒介的直接的自己同一性に於いて成立する斷絶を容れない非合理性であると言はねばならぬ。それは歴史の底にある非歴史的なもの——生命に於いては未だ勝義に於ける時間はなく、むしろ非時間的であり、歴史を簡単に發展といふことが出来るとすれば、永遠に繰返して發展しないものであるから——社會の底にあつてそれを支へるもの——その直接的非合理性の故に具體的な對立性を含まないけれども、社會の對立の統一に於ける合理性の成立する地盤である——でなければならぬ。個人の人格的統一の底にも生命の交互媒介的な自己同一の滲透的交點としての非合理的な肉體性——種族の血の統一に於いて生れながら、生むものとしては却て分裂態たる性別を有し、更に物質的意識的な直接的統一——がなければならぬ。

ところで生命性を基體性として自覺する人間は、單に生命の次元に止るものであることは出来ない。生命性の特色はその直接性にある。そして直接性の直接性たる所以は、その中にありそれに捉へられてゐるものにとつてそれが自覺せられ得ないといふ點にある。生命の次元にのみ止るものにとつては、それを基體性として自覺することは不可能

でなければならない。人間が生命の次元を超えてより高い次元にあるといふことは、生命性の媒介的自己同一の直接性が破れ、單に相互滲透に止つた媒介關係に斷絶が入り、斷絶を隔てて對立するものが行爲の無を通じて統一せられるといふこと、單に行動するものではなくして行爲するものといふことでなければならない。この場合、生命が絶對に媒介性を含まない純粹に非合理的な流動の如きものと解せられるならば、行爲に於ける斷絶が如何にして生ずるかは考へられない。直接性はその中に捉へられてゐるものには自覺せられないけれども、しかも直接性の自覺といふことが言はれるからには、その中に捉へられてゐるものを言はず外に抛出し解放するものが直接性そのものの中に含まれてゐなければならない。人間が生命の次元を超えて出ること、それは生命性そのものが元來媒介的構造を持ち、それが自己分裂するといふことと相即してゐるのである。ところで行爲に於いては、斷絶が先づあつて、それを行爲が統一するといふのではなく、却て行爲に於いて斷絶を見出しながら、しかも行爲に於いてそれが統一せられるのでなければならない。對立を對立として顯にするのが行爲であると共に、對立を媒介としてその統一の上に行爲が成立するといふこの事態は正に一の飛躍によつて措定せられるのである。

行爲に於いて人間は生命的基體の直接的な自己同一性を破つて主體として超出すると共に、基體に於ける環境の面を客體として超越的に自己に對立せしめる。生命的基體に於いて直接的に媒介せられ統一せられてゐた生物體と環境とは、行爲に於いて、主體の基體よりの超出即基體の客體への移行として超越的に分裂し對立するのである。しかし主體客體のこの分裂性對立性は又行爲を通じて統一せられるのでなければならない。基體より超出した主體は、超出に於いて自己に超越的に對峙せしめた客體界に積極的に内在して行くことによつて、自己の生命内容を實現するもので

なければならぬ。かかる行爲に於ける超越と内在との、超越の契機に即して可能性が顯になる。一般に行爲に關する可能性、所謂可能存在の如きものでなく行爲的な可能性、は直に分裂對立性を指示し、分裂性は可能性として自己を顯にするといふことが出来る。すなはち客體は單に必然性の體系としての自然ではなく、客體としては常に形成可能性、すなはち表現の素材の意味を持つものでなければならぬ。それと共に主體は主體として基體を超出することにより環境を客體に轉じ、斷絶を指定することによつて、環境からの直接的規定を斷切つて行爲の可能性を持つ自發的主體となるのである。しかし客體は單に可能性であるのでなくそれ自身の必然性を持つものでもなければならぬ。すなはち行爲の内在的契機に於いて主體が積極的に客體に働きかけるに際して、客體の必然性は抵抗として自己の實在性を示し、主體の自發性も却て自己を否定して客體の必然性に隨ふ外働きやうがないのである。行爲は超越内在兩契機の相即に於いて自己否定的性格を持つといふことが出来る。この行爲の超越即内在の媒介轉換に於いて身體性が重要な意味を持つて来る。主體客體の斷絶は絶對の斷絶である。しかしかく主體客體が單に一重的に斷絶對立してゐると考へるならば、それが即内在として統一せられることの必然的意義は考へられ得ない。それが成立するためには主體自身が自己の内に主體ならざる客體的なるものを持つと考へなければならぬ。一般に單に一重的な對立といふことはあり得ない、對立するといふことは同時に自己の内に、對立する反對の契機を持つといふことでなければならぬ。すなはち主體客體は單に一重的に内と外として對立するのではなく、同時に主體客體夫々の内部に於いても分裂があるのである。主體の客體に對する態度を企畫的と言ひ、客體をそれに對して素材的であると言ふならば、企畫的意志は主體に屬しながら恣意的には如何とも出来ない實在性を持ち、その意味で却てそれ自身企畫の對象となり得る容

體的なものを、客體は同じく素材性を持ちながら、それに盡きない主體的なものを、夫々内に持つのでなければならぬ。かかる二重の意味を持つものが身體であると考へられる。身體は主體的客體的として行爲の超越即内在の媒介であり、單なる生命的肉體の次元を、超えた意味を持つものである。基體からの超出によつて自發的となつた主體が、かかる二重的な身體を媒介として、客體の必然性に自己を否定して内在するところに具體的な行爲が成立するのである。

行爲には表現せられ實現せられる内容がなければならない。客體に向つて働きかける企畫的意志には企畫の内容がなければならない。しかしその内容は直接的に個人的な意志内容であることは出来ない。生命の次元に於いても環境は先づ種族的に規定せられ、個々の生物體の持つ環境は種族といふ限界から外に出ることは出来なかつた。同様に基體の分裂によつて客體に對して顯になる主體は、個的なものであるよりも先に種族的なもの、個的主體間の關係に於ける統一として自己を維持する共同的主體でなければならない。主體客體の否定的相即たる行爲に於いて實現せられる内容は先づ共同的主體の内容であり、表現は共同的主體の内容の實現として具體的な意味を持つて來るものでなければならない。しかしながら個的主體間の統一としての共同的主體が先づあつて、その内容が客體に於いて表現せられ實現せられるといふのではなく、共同的主體の統一そのもの、個的主體間の關係そのものが却て客體と媒介せられて成立するものであることは、生命に於いて種族が自己を維持するためには却て環境と媒介せられねばならなかつたのと對應する。すなはち共同的主體の統一、個的主體間の關係は、却て主體の客體に對する行爲を通じ、主體的客體的な表現を通ずるものでなければ成立することが出来ない。單に主體と主體との直接的な關係といふものはない。主體は

直接に主體に向つて働きかけることは出来ない。最も簡單な主體間の關係と雖、身體を通じて客體的なものと媒介せられるのでなければ成立たないのである。ところで主體的客體的な表現が主體間の關係の媒介となり得るのは、それが元來主體間の統一たる共同的主體の内容を實現してゐるからである。それが純粹に個人的な内容の實現であるならば、如何にして了解の對象となり、逆に主體間の關係を成立せしめ得るかといふことは理解出来ない。行爲に於いて實現せられる内容は根源的に共同的なのでなければならぬ。

しかし行爲に於いて實現せられる内容が根源的に共同的でありながら、主體間の統一としての共同的主體が却て主體的客體的な表現を媒介として成立するといふことは、共同的主體が生命的種族の如く斷絶を容れない直接的統一ではあり得ないことを示すものでなければならぬ。すなはち共同的主體の統一が主體客體的斷絶の統一を通じなければならぬ——に轉ぜられ、共同的主體が即自的にその實現たる客體に於ける表現を通じて對自的となり、主體間の斷絶の統一として行爲的に成立し確保せられることではなければならぬ。ここに共同的主體の内に斷絶が入り、個的身體的主體は共同的主體からの直接的規定を破り、背反の可能性を持つものとして自主獨立的となる。客體の形成可能性に對し主體の行爲可能性はこの共同的主體からの背反可能性に於いて具體的となる。すなはち客體に於いて實現せられる内容は單に共同主體的に止らず同時に自己のものであり、行爲は共同的主體の實現でありながら、常に同時に自己のものであるといふ意味を持つのである。しかしここにも主體客體的對立的統一に見られた超越即內在の關係が見られる。すなはち直接的規定を破り、背反の可能性を持つものとして共同的主體を超出した個體は、その獨立自主

の内容を企畫實現するために、却て自己を否定して共同的主體の内容をも同時に實現するのでなければ行爲することが出来ない。共同的内容を全然捨象してしまつた個的内容は考へられ得ない。個體と共同的主體とも超越即內在的に對立を通じて統一せられるのでなければならぬ。かく考へて來れば自主獨立的な個體の成立は單に我と汝との對立の否定的統一として考へることは出来ない様に思はれる。我汝の對立は、それが直接的である限は、いかに激しくても私的である。その對立が、主體客體の斷絶の統一たる表現を媒介とする、共同的主體の直接的統一の對自化として、第三者と媒介せられて間接的となり、我汝の對立が主體と共同的主體との對立に媒介せられるのでなければ、私的人格を脱して社會的とはならない。個體の自主獨立性は共同的主體への背反可能性にあるのであるから、個體と個體との直接的な關係から出發すればその背反可能性を導き出すことが出来ない。我と汝との對立が、共同的主體の疎外せられたものとして、無數の個體の對立を意味し、我汝の否定的統一即主體共同的主體の否定的統一であるのでなければ、個體も具體的に社會的な個體として成立することは出来ない。汝はその背後に無數の第三者を持ち、この第三者の媒介による間接化がなければ我汝の對立は社會性を失つて私的となる外はないであらう。

主體間の統一としての共同的主體は主體客體間に成立する表現を媒介として對自化せられ具體化せられるが、しかし又同時に後者が前者によつて媒介せられ具體化せられることがなければならない。行爲は常に目的選擇的でなければならぬ。目的意識的でない行爲は具體的な行爲であると言ふことが出来ない。しかしその目的は主體客體の關係のみから定めることは出来ない。行爲を單に主體客體の關係のみから見るときには、あらゆる行爲は客體の變化であると共に直ちに主體の内容の實現として表現を形成するであらう。そしてかかる表現はいづれも主體の直接の表現で

あり、その直接性のみ注目すれば價値の優劣を持たない、むしろ價値に無關係であると言はねばならない。それが具體的に社會的であり、價値關係的であるのは、その直接性が行爲の目的選擇の契機に於いて主體間の關係に媒介せられて間接化せられるが故である。かくして主體客體の超越即内在として成立する行爲は主體共同的主體の超越即内在と媒介せられ、後者は又前者と媒介せられて具體的な社會的實踐となる。行爲は客體への方角と共同的主體への方角とに於ける超越即内在の關係の交互媒介的統一に成立する社會的實踐でなければならぬ。

行爲はかく超越即内在として、絶對に共通な媒介のないところを却て媒介のないといふこと、すなはち無を媒介として統一する自己否定的性格を持つのであるから、行爲はすべて自由であると言はねばならない。個體は超越の契機に於いて客體共同的主體の直接的規定を破る絶對的自發性を有する。しかし單なる絶對的自發性が自由なのではない。客體共同的主體の規定を全然排除してしまふとき、自發性が自發性に止るとき、行爲は成立しないからである。却て自發性が自發性として成立するためには、個體は客體共同的主體の規定の内に自己を否定しそれによつて規定を自己の内に收めるといふことがなければならぬ。同時に又客體共同的主體も個體の自發的自由と媒介せられなければ、客體は客體としての意味を失つて單に對象的に見られる自然存在になり、共同的主體は主體性を失つて同じく自然的なものに墮し、却て個體を規定することが出来ない。行爲する個體はその一々の行爲に於いて自己否定的に自由であると言はねばならない。凡そ自由でない行爲はない。行爲があるところそれは直に自由であると言はねばならない。しかし道德の立場にあつては即目的に自由であるといふのみでは充分でない。問題は自由の對自的自覺、自己の自由の意識にある。

基體は主體性を支へ、變化を通じて恒存するものであると同時に、却てそのことのためにはそれ自身對立動性でなければならぬと言はれる。單に主體性を支へる統一であるのではなく、その統一が却て主體性の統一の疎外せられたものとして直に對立性であるといふのでなければ、すなはち基體性も主體性と媒介せられるのでなければ、主體性を支へるといふことさへも出來ないであらう。かく言へるならば基體性を簡單に生命性であると言つてしまふわけに行かなくなる。純粹な生命性は媒介的ではあつても絶對的な斷絶對立を持たない直接的統一であるからである。勿論主體性の底には絶對に主體性によつて合理化せられない非合理的な生命の統一がなければならぬ、歴史の底には歴史化せられない永遠の繰返しとして非歴史的な生命性がなければならぬ。しかしながら歴史的な主體にとつては、その非合理性非歴史性も、合理性によつて媒介せられた非合理性、歴史によつて媒介せられた非歴史性であるのでなければ、歴史的な主體自身が成立することが出來ない。すなはち絶對の非合理性非歴史性としての生命の統一は行爲の根柢にあるものとして denkbar ではあつても、そのままでは erdenkbar なものとして現實的な行爲の企畫内容に入込むことは出來ない。それが erdenkbar となつて主體的統一の成立の媒介となり得るためには、既に主體性によつて媒介せられてゐなければならぬ。すなはち生命的種族は行爲によつて媒介せられて主體性を持つ共同的な社會となり、生命的環境は行爲によつて媒介せられて客體性を持つ特殊な世界となるのでなければならぬ。現實に於いて個體が見出す基體性は共同的社會、特殊の世界に於いて既に主體性と媒介せられてゐる。すなはち現實的基體は生命の直接的媒介的な自己同一性に止るものではなく、行爲に於ける斷絶對立を通じて無と媒介せられながら、生命の直接性を保持する限り、その媒介が自覺せられない即目的統一であると云はねばならぬ。かくして基體性が變化を

通じて恒存する統一であると同時に對立動性であると考へられる。

基體性をかく考へるならば、その自己否定的性格よりして刻々に自由であると考へられた個體の行爲も、それが直接性の内に止る限、直に自覺的であるとは言へず却て基體的な在り方に墮するものと言はねばならない。基體性は行爲の地盤でありながら、しかも行爲に於いてより外には自己を現す道がないとすれば、人は直接的行爲に於いて基體性に出會ひ、その對立の内に止ると言はねばならない。かかる個體の基體的な在り方が日常性であり、そこに於いて個體は刻々に自由でありながら自覺的でないが故に、それは却て道德的自覺、自己の自由の自覺の基體地盤と考へられる。行爲が人間の本質的性格である限、人間にとつては無と媒介せられ、自己を否定して生きる、所謂死して生きる外に生きやうはないと言はねばならない。行爲する個體は、行爲のこの自己否定的性格よりして刻々に自由なのであるけれども、しかし日常性の内に止る自己にとつてはこの自由は自覺せられないから、それは自己でありながら自覺でないものとして基體の自己疎外性の内に止る非本來的自己と言はねばならない。それは無を通じて自己の自由を自覺する本來的自己の自己疎外として、自己の無を自覺しないけれども、無は却て所謂不安に於いて自己を顯するのである。

即目的直接的統一たる基體性は自己疎外態としては同時に分裂對立であると言はれた。ところで主體客體の關係に於いては勝義に於ける對立分裂があるとは言ふことが出来ない。前述の如く、主體客體の關係のみから見れば如何なる行爲も常に表現を成立せしめることには變りはないからである。眞の對立は價値の對立でなければならぬ。すなはち眞の對立は主體客體間の作爲を通じつつ主體間に成立すると言はねばならない。主體の共同的社會からの背反に

於ける主體間の對立が勝義に於ける對立であると言はねばならない。ところで主體共同的社會の關係は常に主體客體の關係と媒介せられるからして、主體の共同的社會からの背反は單に一重的直接的であることは出来ない。主體は、主體客體間の超越即內在たる行爲に於いて、同時に共同的社會に超越即內在的に自己を否定することなくしては、客體に於いて自己を實現することが不可能であるといふのが行爲の本質的性格であるからである。共同的社會の内に自己を否定するのでなければ共同的社會から背反することさへも出来ないのである。すなはち背反は主體が一度自己を共同的社會の内に否定しつつ、却てそれを自己のものとして化する、それを自己實現の手段と化する——積極的消極的の差はあつても——ことでなければならぬ。ところで共同的社會は我汝彼の統一として無數の個體を含むものであるからして、我が共同的社會を自己實現の手段に化せんとするとき、それは同時に我汝彼といふ個々の主體間の對立を惹起せざるを得ない。逆に個々の主體間の對立に於いて我が汝を自己實現の手段として利用しようとしても、直接的にそれが出来るのでなく、却て自己を一度共同的社會の内に否定しつつそれを自己實現の手段とするのでなければ不可能である。すなはち主體共同的社會の對立抗争は必然的に主體間の對立を惹起し、逆に主體間の對立抗争は直に主體共同的社會の對立に轉ぜられるのである。この主體共同的主體の二重の對立性は實はそれが常に客體的世界に媒介せられることによつて生ずるのであるが、かく主體共同的社會に對立が生ずるとき、それは又主體客體の關係へ反映せられてそこにも對立が生ずるのでなければならぬ。すなはち共同的社會への自己否定を更に否定して直接的自己肯定に轉じ、社會を自己のものと化する主體は、客體的世界をも積極的或は消極的に自己のものに化し、自己と世界更に世界と世界との對立をも惹起するのである。社會的な對立は常に物に即して起り、しかもそれによつて客體的世界にも

對立が生ずるのでなければならぬ。基體性の直接的即自的統一は、自己の媒介性を自覺せずして強制として現れるが故に、常に個的主體の恣意的背反を必然的とし、却て自ら對立性の契機に墮する外はない。

日常的非本來的自己は常にかかる分裂對立性の内に自己を置く。個體の底深く横る生命的肉體性にかかる日常的自己の分裂對立に於いて自己を現すのでなければならぬ。日常的自己の對立には必然的に肉體的感性的欲求が伴ふ。純粹な感性そのもの、肉體性そのものは、絶對に非合理的盲目的衝動性として、それ自身價値の對立を持たず、却て人生の豊富さに役立つものでなければならぬけれども、それは純粹な形で現れるものではない。現實にはいかに激しい情熱にあつても常に習得されたものが入込んで居ると言はれねばならず、純粹な衝動性はやはり denkbar であつても *unerkennbar* であると言はねばならない。純粹に非合理的な生命性も行爲に於いて主體性と媒介せられて始て、統一が同時に對立に化する現實的基體となる如く、純粹な感性的衝動性も常に日常的自己に於ける欲求の分裂對立として現實的となり、行爲の計算の中に入つて来る。自己にあつて自己ならざる非本來的な自我性は感性的欲求と不可分離的な生命意志的主體である。

しかしながらかかる基體の分裂對立性は、日常的自己が日常性の内に止る限、意識せられない。所謂不安に於いて無が自己を顯にしても、それをそれとして意識しないが故に日常的自己なのである。日常的自己に於いて蔽はれてゐるものは單に本來的自己のみではない。それは實に自己の非本來性を蔽つてゐるのである。何故なら自己の非本來性、日常性をそれとして意識することは、その即自性に於いて含まれてゐる對立を對自化することとして、正に日常性そのものを破棄することであるからである。故に日常的自己に於ける對立の意識は常に對外的たるに止る。對立に於い

て他を非難し、裁き、それによつて他を自己に收め自己實現の手段として利用しようとはしても、對立の眞の意味を知らないために、それが對內的に轉ぜられることがない。日常的自己は眞に自己を非難し、自己を裁くことをしないのである。

眞に自由の自覺、道德的自覺が成立するためには、基礎の對立性が對自化せられなければならない。對立が對自化せられるとき、自己と共同的社會、自己と世界の言はば外的な對立は直に自己内の對立に轉ぜられる。すなはち自己の非本來性を自覺することによつて自己の内部に於いて本來的自己と非本來的自己との對立が對自化せられる。ところで對立性の自覺は同時に可能性の自覺でなければならない。對立を自覺することによつて自己は可能性の内に自己を立てる。對自的な立場に於いては、可能性は、日常的立場に於ける如く單なる一々の行爲の可能・否定可能として言はば平面的なものに止り得ず、直に自己の善と惡との可能性として道德的意義を持ち、自己自身の存在が問題となるのでなければならない。ところで可能性の存在が直に自由であるといふことは出来ない。何故なら可能性は時間的には未來的であるに對し、自由があるところ直に現在であり現實性でなければならないからである。未來は現在へ來らんとして未だ來らざるもの、可能性は現實性に向つて傾き働きかけながらしかも非現實的なものである。しかし常に現時的、現實的でなければならない自由は、その自覺のために却て未來的、非現實的な可能性の自覺を媒介としなければならない。可能性の自覺なくしては自由の自覺はない。しかし又逆に可能性が自覺せられるためには現實性が媒介とならねばならない。すなはち自己の對立性を自覺し、自己を可能性の内に置くこと、それは却て自由によるのでなければならない。かく考へるならば、可能性の自覺といふとき、自己は善をも惡をもなし得るものとしての自由、

すなはち單なる平面的可能性或は能力を自覺するのでないことは明かである。善への可能性と惡への可能性とが言はば平面的に並立して自覺せられ、自己がその一を選ぶことによつて自由であるといふのではなく、自由の自覺が可能性の自覺と媒介せられてゐると同時に逆に可能性の自覺そのものが現實性としての自由に媒介せられてゐる、すなはち自己は自由に於いて可能性の一を選びつつ可能性の内に自己を立て、しかも可能性によつてその自己の自由が自覺せられるのでなければならぬ。かかる事態はその循環性の故に正に飛躍によつて措定せられる。日常的立場から對自的立場へは連続的な移行によつてではなく非連続な飛躍によつて達するのである。しかしこの場合可能性の自覺は對立性の自覺であるからして、自己は善への可能性を直接に選ぶことは出来ない。すなはち自己は常に惡への可能性を選びつつ善への可能性に對して自己を立てる、自己の非本來性を自覺し本來的自己の可能性に對して自己を立てるのどなければならぬ。かかる善への可能性を所謂可能存在として無時間的な本質と區別し、常に自己の可能性として惡の可能性と結び合ひ、自由によつて媒介せられる個體的本質或は實存的可能性といふことが出来るであらう。

單なる未來、單なる可能性といふものはなく、それは常に自由な現實性に媒介せられて對立性に於いて自己を顯にするのであるが、それと同時に日常的非本來性に止つてゐた過去が悔恨に於いて對立性を現して來なければならぬ。外的對立が内的對立に轉ぜられ、自己内に於いて本來性と非本來性とが對立を生ずるとき、その非本來性は背後に全過去の勢力を持つて迫るものでなければならぬ。すなはち未來的實存可能性に對立するものは現在の自由ではなくして、實は惡としての過去の必然性である。必然性現實性可能性の三者、時の様相に當極めて言へば過去現在未來の三者は平面的に相並ぶものではなくして、必然性と可能性、過去と未來とは現實性現在の構造契機として立體的

に考へられねばならない。あるものは唯現實性現在のみでありながら、それが直接にあると言はれるとき直に自己を否定して必然性と可能性、過去と未來との對立が現れるのである。自己と社會、自己と世界との對立に於いて直接に自己を肯定する惡の自由が對自的に自覺せられるとき、空間的對立は時間と媒介せられ必然性と可能性との對立として自覺せられるのである。日常的自己の即自性に於いて不安として現れる無が自己の惡の意識に飛躍的に對自化せられるとき、過去の必然性に即して悔恨が、未來的可能性に即して希望が現れるのである。

普遍的なるものは直接に有として限定力を持つものではあり得ない。普遍的なものも直接に限定しようとするときには却て相對的な特殊的基體性の内に陥り、對立性に於いて自己を否定せねば止まないからである。普遍者が自己の普遍性を維持するためには、直接性に於ける有の對立を否定して成立する無的なものであるのでなければならぬ。普遍が具體的に成立するのは一度自己を否定して直接的特殊的となりながら、更にそれを否定して自己を回復するところに於いてである。普遍は自己の内に自己ならざるものを持ちながら、それを媒介として具體化せられるのでなければならぬ。逆に直接的特殊なものもが基體性として直に對立動性であると言はれるのはそれが單なる直接性であるのでなく、却て普遍を具體的に成立せしめる媒介となる自己疎外態、自己否定態であるからである。しかしながら普遍を直接的な特殊に疎外せしめるものは元來主體的客體的な二重性を持つ個體でなければならぬ。基體が純粹生命的な種族、環境の斷絶を容れない統一でなく、主體性を含んだ共同的社會、客體的な特殊の世界と考へられねばならない所以である。個體は世界に作爲しつつ直接に共同的社會を限定しようとするこゝによつて、それを即自的統一としての強制に轉じ、自己自身恣意的なものとしてそれに對立し、あらゆる方向に對立を見出すに到るのである。か

かる直接的基體の對立は自己疎外として實は普遍の内にあり、その無的統一に支へられて居りながら、個體の非本來的自我性の作爲により自己をそれから切離すのでなければならぬ。日常的立場から對自的立場への飛躍は自由による自己意識の飛躍的發展であるけれども、そこには同時に普遍の無的統一の方が働いてゐるのである。

自己の惡の自由を自覺する對自的立場に於いて基體の自己疎外性が知られるとき、自己は尙自己疎外性のうちに止りつつ、それを包む具體的普遍との媒介關係を自覺する。過去と未來、必然性と可能性とが現在現實性の構造契機として立體的に對立すると言はれたのはこの意味でなければならぬ。すなはち未來的可能性に於いて理性の普遍が現れると共に、過去の必然性に於いて基體性が惡として現れ對立するのである。善と惡とは同一次元に平面的に對立するものでなく、惡自身の平面的對立に於いて言はば上下の對立として現れるのである。普遍として理性は直接的限定力を持たないから、形式的に當爲といふ善への可能性の形で現れる外はないのであるが、それと共に自己は共同的社會に於いて、單に自己と言はば外的に對立する強制に止らず、自己を生み出して來た生命の根源として却て自己が理性を實現して本來的自己となるための媒介者を見出す。形式的にしか規定する力を持たない理性の當爲を具體的現實的ならしめる媒介となるものは直接的な内容を持ち、個體の生命の根源の意味を持つ共同的社會なのである。對自的立場に於いては基體性の對立は單に外的平面的たるに止らず、理性の普遍性との媒介が明かにせられることにより立體的となるのでなければならぬ。

飛躍的に惡の自由に於いて基體の對立性は對自的に自覺せられるが、しかしそれは直に統一の成立ではない、基體性の止揚ではない。自己の實存的可能性に身を置くことは直にその現實化ではない。對自的立場はあらゆる處に矛盾

を顯にする立場である。そこに於いて自己は即自的日常生活を破ることにより一步普遍的なものに近づくけれども、しかもそれは同時に普遍的なものに背く一步でなければならぬ。自己の本來性非本來性の對立を媒介として、個々の行爲に於ける言はば平面的な可能性の對立は所謂動機の對立を生ずるのである。特殊なもの相互の對立と特殊と普遍との對立とは相互媒介的に益、對立を深刻ならしめるのである。人はかかる事態に於いては、基體性のうちに止りながら、不作爲をも作爲と見做しつつ——道德の立場では否定は消極的ではない、不作爲は反對方向に於ける積極的な作爲である——普遍的なものを以て自己を裁くからである。しかしかく言はれるのは基體性が單に對立性であるのではなく同時に即自的直接的統一、直接的連続であるからに外ならない。人は生きることを一時中止することは出来ない。對立を具體的に統一することが出来なくても事態を止めて置くことは出来ない。直接的連続が對自的立場の内面性に對する言はば一種の反射運動として即自的日常生活の方向に働くが故に、對立は常に新に措定せられて行く。對自的立場の動性はその立場が單に自己の内部に對立を持つのみでなく、同時に即自的日常生活と對立することによつて生ずるのである。かく普遍的理性の實現を妨げ、自己の自由によつて對立性の内に止らしめる基體の *unerkennbar* な生命の直接的統一、直接的連続こそ正に運命でなければならぬ。運命とは單なる必然性でもなく、單なる偶然性でもない。それは必然的な偶然性、否むしろ自己の惡への直接的自由による生命の必然性でなければならぬ。すなはち自己は即自的直接的に運命を否定して自由に作爲しつつ、しかも却て運命の鎖の内に自己を繋ぎ、自己を見出すのである。かく對立を自覺しながら却てそれを措定し、基體性を自覺しながら却て自由にそこに止りつつ惡無限的に繰返す對自的な立場にあるものにとつて、許されることは唯無限の墜落の外にはないであらう。

かく普遍者を知ることによつて益、普遍者に背く、惡の自由による絶對的な對立を具體的な統一に齎す行爲には立場の飛躍がなければならぬ。常に飛躍的な行爲も直接的立場に止る限、對立を深化する一方だからである。しかしかかる立場の飛躍は正にそれが飛躍であるが故に對立自身の外に媒介者を持たない。對立自身がその媒介となる外はないのであるから、却て對立を徹底することによつてその底から起るのでなければならぬ。基體性の對立には二重の意味があつた、即自的平面的なものと、對自的立體的なものと。そして即自的に自己肯定的對外的に止る對立を自己否定的自己内對立に轉ずる媒介となるものは普遍的理性であり、逆に普遍的理性は無的なものとして自己疎外の直接的對立と媒介せられずには自己を實現することが出来ないから、對立を止めることによつてではなく却てそれを惡無限的に徹底することによつて對立が自己自身を否定し、普遍的な立場への飛躍が生じ得るのである。本來的な自己にならうとすること、自己自身に對して誠實であらうとすること、それは喜劇的になるといふ危險を持つ。誠實であらうとすることは直接的な自己を否定せんとする意志であるけれども、しかもそれが否定せんとする直接的なもののために普遍的本來的な自己を直接に知り得るものとなし、自己を相手の芝居に終り得るからである。しかもかかる危險を有するが故にこの意志は又最も悲劇的であり、この恐しい決意を通ずることなしには立場の飛躍はあり得ないのである。

普遍者を知る立場からそれを信じて行ふ立場への飛躍は普遍者の否定たる基體の對立性を通じての普遍者の回復實現として否定の否定、所謂絶對否定でなければならぬ。個體は絶對否定的に直接的な惡の自由を否定して善の自由に於いて行爲し、普遍的理性を實現するのであるが、しかしそれは直接的ではあり得ない。すなはち道德的價値は作

用、行爲の價値として直接的に目的となされ得ず、常に質料的なものに於いてそれを目的としつつ間接的に實現せられる外はない。個體が絶對的な對立の底から、普遍的理性を信じ、客體的世界に於いて作爲しつつ直接的に強制として個體と對立しながら、基體としてはその生命の根源である共同的社會の内に自己の非本來的自我性を否定するとき、却て死することにより生かされて普遍的理性を實現し本來的自己となることが出来るのである。かかる立場に於いて個體は運命的必然性に纏綿せられざるを得なかつた惡の自由を否定して善の自由に轉ずると共に、自己をより高い必然性の内に置く。すなはち理性の實踐的必然性を自覺する。勿論實踐的必然性も運命的必然性も同じく自由に媒介せられるのであるけれども、後者が直接的に止るに對し、前者は深く自己の内から迫つて來る運命的必然性を自覺しそれを破つて働くときに成立する高次のものである。かかる高次の立場で、自己の自由即實踐的必然として自覺は絶對否定的に即且對自的となるのであり、對自的立場に於いて否定せられた日常性は再び回復せられ、それと自己との和解が成立する。日常性は自覺の出發點であると共により高い意味に於いて自覺の歸着點である。

基體的共同社會も個體の善の自由により理性の普遍性に基礎づけられて具體的全體となるのである。全體と個體との相即はここに成立する事態であつて、直接的に個體が夫々の立場で全體を表現すると考へらるべきではないと思はれる。全體と個體とが表現の關係で直接的に相即すると考へられるならば、善惡といふ相互に否定的な關係にある積極的な質的對立の意義が見失はしないかと思はれる。個體は普遍的理性の媒介なくして直接的に行爲するならば、その自由は直に惡の自由に墮し、却て全體との相即を破つてそれから背反するものでなければならぬ。更に共同的社會への個體の自己否定は客體的世界を媒介とせねばならないからして、客體的世界も理性の普遍性に基礎づけられて具

體的な世界歴史的世界の統一に入るのでなければならぬ。個體が直接に作爲する世界は直に普遍的であるとは言へない。行爲に於ける客體的世界の契機に成立するものを文化といふならば、文化は直接的に普遍的な人類的存在とは言へない。文化と雖個體の共同的社會からの背反の媒介となり得るものであるからである。それは個體の絶對否定的行爲に於いて共同的社會への自己否定の媒介に轉ぜられるとき、理性の普遍性に基礎づけられて特殊でありながら同時に普遍的な人類的存在となるのである。個體は絶對否定的行爲により、社會への方向に於いて全體個體の相即として具體的統一を成立せしめると共に、世界への方向に於いて自己の屬する全體の制限を超えて人類の普遍性を獲得するのである。

空間的な統一の成立は又時間的でもなければならぬ。すなはち過去と未來、必然性と可能性との對立は自己の自由即理性の實踐的必然として、眞に自覺的な行爲に於いて現在の統一に入るのである。現在には行爲的でなければならぬ。しかし行爲する個體の二重性、自由の二重性に對應して現在も亦二重性を持つ。瞬間が絶對であり、現在が永遠と時間との觸れ合ふところに成立すると言はれるのは、直接的には現在ならざる過去未來の二契機の對立として自己を否定しつつ、更にそれを否定して對立の絶對否定的統一が成立するとき成立つ事態でなければならぬ。單に現在に生きる、瞬間の内に生きるといふことは普遍的絶對的理性に背く安易さである。眞の現在、絶對的な瞬間は對立性の苦惱に絶望しつつ、しかも理性を信じて生きる自覺的行爲の立場に於いて成立つのでなければならぬ。前に行爲は企畫的であると言はれたけれども、理性を實現する眞に具體的な行爲は理性の持つ無的性格の故に單に企畫的であると云ふことは出来ない。企畫といふことは本來未來的性格を持つのであるが、しかもその内容となりその計算に入込み得るものは過去のな既知のものである外はないのであるから、企畫はそれ自身の内に未來的なものと過去のな

ものとの對立を持つと言はねばならない。理性の實踐的必然性が過去未來の對立の行爲的な統一である絶對的な現在に於いて成立するといふことは、それが企畫自身の内にある合目的過去のものと、企畫的未來的なものとの統一することによつて企畫性を超え、その計算の内に入込み得ない偶然的なものを持つといふことでなければならぬ。それが實踐的必然性が自由を媒介とするといふことの具體的な意味であると共に、*unerkennbar* と言はれた生命的非合理性もかゝる偶然的なものに於いて閃き出る餘地を持つのである。

しかし普遍的絶對的理性の實現は基體の相對的對立性の直接的な否定滅盡を意味することは出来ない。基體性はその對立性そのものが統一に於いて人生の豊富さに役立つものである。すなはち基體性は無に於ける主體的絶對的統一を支へつつ自己を維持する直接的統一、直接的連續の非合理性として、否定征服せられて後合理化せられるのではなく、その否定は却て直に肯定としてそのまま合理化せられるのであるから、理性の實現は單に一度限一重的に成立するものであることが出来ず、基體の非合理性に引かれて更に新なる對立に陥るのでなければならぬ。現在の無に於ける統一は反對勢力たる基體の直接的連續に引かれて過去に轉ぜられて行くのでなければならぬ。自覺の出發點であり對自的立場に於いて否定せられつつ理性の實現に於いて再び回復せられる日常性は、それを基礎づける無の統一の崩壊と共に又新なる自覺の出發點となる。道徳の立場は絶對的普遍的理性の實現に於いて常に絶對性を保ちながら、その實踐的必然性が單に消極的に個體の自由を可能ならしめるに止らず、積極的に社會の方向と世界の方向とを對立を通じて統一する個體の自由による必然性でなければならぬから、常に社會、世界の相對性を脱することが出来ず、歴史的な無限の進行過程の立場に止らなければならぬ。個體は理性の實踐的必然性に即して自己の絶對性を自覺しつつ、自己の自由に即しては無限進行的な努力を續けなければならない。